

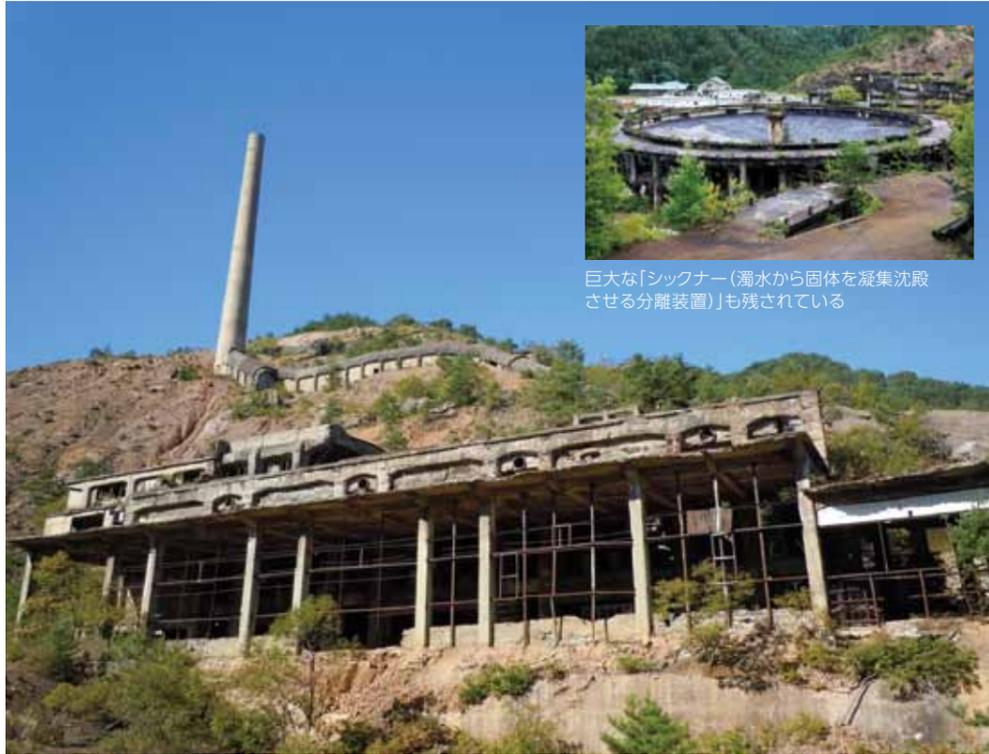
史跡尾去沢鉱山



「石切澤通洞坑入口」から、観光坑道へ。ここは唯一見学で入ることができる坑道



「グラウンドマイン」と呼ばれるシュリンケージ採掘法による採掘跡。鉱石を下から上へと採掘し続けることで巨大な谷ができ上がった



巨大な「シツクナー（濁水から固体を凝集沈殿させる分離装置）」も残されている

コンクリートの城塞のような製錬所跡。その奥の山腹にそびえ立つ巨大な煙突に向かって、大蛇のように煙道が伸びる



昭和39年、活気に満ちていた尾去沢鉱山の全景



いまや製錬所のコンクリート柱は朽ちて草生している

【尾去沢鉱山の概要】

- 発見：和銅元年（708年）
- 閉山：昭和53年（1978年）
- 推定総産出量：銅30万t、金4.4t、銀155t
- 遺産認定：土木学会選奨土木遺産、近代化産業遺産

日本近代化の源流を訪ね 国内最大規模の坑道に潜る

史跡尾去沢鉱山 秋田県鹿角市



色づいたリンゴに小さな秋を発見



穏やかな行まの鹿角市街



「道の駅がづの」には鉱山とともに鹿角市の文化を代表する「花輪ばやし」の屋台も

近年「世界遺産、日本遺産、近代化産業遺産」など、日本の歴史と文化を後世に伝えるための「遺産」に熱い視線が注がれている。だが幕末・明治にはじまるわが国の近代化を支えた工場や鉱山などは、その価値を理解されないまま遺棄・放置されているものが少なくない。大切なのは、どうやって残し活かすかだ。今号は、近代化産業遺産の一つ秋田県鹿角市（かづのし）の「史跡尾去沢（おさりざわ）鉱山」にスポットを当て、日本の銅産業に大きな足跡を残した同鉱山の「いま」を見つめる。

巨大煙突・ガリバーの足元に 煙道の大蛇が絡み付く

9月初旬、厳しい残暑が続く東京を出発し、秋田県北東部に位置する鹿角市尾去沢にある「史跡尾去沢鉱山」へ向かう。我々は青森空港から東北自動車道を南下するルートを選択した。生憎の雨で十和田湖、岩木山などの土地を代表する景色は霧の中に。それでも沿道から見える赤く色づいたリンゴに「秋の東北」の気配が漂っている。鹿角八幡平ICを降りて花輪の街中へ。ここまで約90分。さらに山道に入って10分ほど車を走らせると、突然視界が開け、大煙突が姿を現す。意外と町から近いことに驚く。

坑道の全長は約800km 日本最大・最古の銅脈群採掘跡

尾去沢鉱山が発見されたのは、1300年以上も前と言われる。本格的な開発は、慶長3年（1598年）、南部藩により行われた。当時は金山として注目され「西道金山」と呼ばれていたが、17世紀後半に銅山として採掘がはじまる。南部藩時代は、手掘りの坑道で幅60cm、高さ90cmほどしかなく、槌と

街と銅の歴史を伝えるスポットへ 鉱山の中で時が巻き戻っていく

ノミで1日30cmも掘り進められなかったと言う。それがダイナマイトを使ったシュリンケージ採掘法になると一気に採掘が加速。南北3km、東西2kmの山中に、約800kmもの坑道が縦横上下に伸びていった。しかし、時とともに銅鉱石は枯渇。別子、阿仁、足尾、日立と並んで日本の主力銅山のひとつとして活躍してきた尾去沢鉱山は、昭和53年（1978年）にその役目を終え、閉山する。

製錬所跡に立つてみる。朽ちたコンクリートは草生し、「夏草や兵どもが夢の跡」の句が思い浮かぶ。だが、悲観することはない。ここは、鹿角市の重要な観光スポットとして「いま」を生きている。「閉山と同時に鉱山で働いていた多くの人々が街を出ていきました。そこで、この鉱山を観光地にして街を活性化させたいと鹿角市と協力し、閉山4年後に「マイナランド尾去沢」をオープンしたのです」と話すのは、株式会社ゴールデン佐渡 支配人の成田 昌幸氏。ここは岩盤が固く、観光客が坑道に入り、当時の採掘跡をそのまま見ることができるといふ貴重な史跡だ。しかもその全長は約1.7kmにもなる。

「オープンと同時にお客様は次々と増え、鉱山中の見学コースだけでは対応できないほどでした。そこで、別の坑道にアトラクション的な施設も建設したのです。しかし、パブルの崩壊とともに観光客が減少し、遊園地よりも本物志向だ」と方向を転換。国内近代化産業遺産として認定されたことを

機に、名称も「史跡尾去沢鉱山」と変更しました。いまは鉱山としてのありのままの姿をご覧いただき、さらにかつて鉱山で働いた人々の姿を人形で再現するなど、文化的・歴史的な意義も伝えていきます。いまでは年間約5万人の観光客がここに集まるほどになりました。その中には、以前鉱山で働いていたお年寄りが、帰省の折りに孫たちを連れて訪れ、昔語りをする姿も見られます」

地元中学校の生徒たちは、授業の一環としてこの史跡でのボランティアガイドを行っている。学年が進むことに異なる分野のガイド内容を学び、3年間で尾去沢鉱山と街の文化・歴史を一通り修得するという。我々も歴史を学ぶべしと坑道の中へ。グラウンドマイン（シュリンケージ）と呼ばれる天井高く、地下深く伸びた採掘跡、江戸時代から昭和までの採掘の様子を再現した人形など、見所は多い。坑道内の温度は1年を通して約13℃。お酒や野菜などの貯蔵にも活かそうとテレストも進めている。すべてを見終えるまで40分近くかかり、すっきり震え上がってしまう。



株式会社 ゴールデン佐渡 支配人 成田 昌幸氏



江戸時代の採掘「からめ場」などを人形で再現。その姿を見ていると自然にタイムスリップしていく